

2024年3月10日

四旬節第4主日

菊地功大司教 メッセージ

ヨハネ福音は、ファリサイ派の議員であり指導者でもあったニコデモと、イエスとの対話を記しています。神がイエスと共におられることを見抜いたニコデモに対して、イエスは、「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と語り、永遠のいのちについての対話を始めます。

その対話の中で、ご自分の受難、死、復活が救いをもたらすことを告げたイエスのことが、本日の福音に選ばれています。

「独り子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」

永遠の命を得るために必要なことはイエスを信じることであって、救いは神からの恵みとして与えられることが強調されています。

教皇フランシスコは今年の四旬節メッセージに、「出エジプト物語の、とても重要な細部を取り上げたいと思います。神が、見ておられ、心動かされ、解放してくださるのであって、イスラエルの求めによるのではないということです」と記しています。すなわち救いは徹頭徹尾、神からの恵みとして与えられるのであって、何かの報酬でもなければ人類の求めに応じたものでもないこと、つまり主導権は徹底的に神にあることを明確にします。それに応えようとするのかどうか。私たちの決断が求められています。

パウロもエフェソの教会への手紙で、「あなた方は、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神のたまものです」と記して、わたしたちの救いは、神からの一方的な恵みによっていることを明確にします。

ヨハネは「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じるものが一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである」と記し、十字架におけるイ

エスの受難と死が、神の愛に基づく徹底的な自己譲与の業であることを明確にします。十字架は神ご自身による、人類に対する愛の目に見える証しの具体的な業であります。わたしたちはその徹底的な神の愛に包まれて、生かされていることを心に留めたいと思います。

福音はイエスが、「真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために」と語ることばを記します。すなわち、神の豊かな愛に包まれて救いへと導かれているわたしたちには、その愛を一人でも多くの人に明らかにする務めがあります。ひとりでも多くの人がある愛に包まれて、ともに光を証しするものとなるように、わたしたちは愛の実践を通じた具体的なあかしの業に務めなくてはなりません。

そもそもわたしたちは、自分の性格が優しいからとか、そういった個人的な理由で愛の業に励むではありません。わたしたちは、神の愛に包まれて生かされているからこそ、その恵みとして与えられている愛を実践することで、ひとりでも多くの人にあかしをしたいのです。

3月11日は東日本大震災が発生して13年の追悼の日です。あらためて亡くなられた多くの方々の永遠の安息を祈ります。これからも、東北各地の皆様と歩みを共にしながら、ひとりでも多くの人がある愛に包まれていることを実感できるよう、証しの業を続けたいと思います。

またこの節目の機会に、この一月の能登半島における災害で亡くなられた方々も心に留め、復興のための歩みを共にする決意を新たにしたいと思います。

神の愛はすでにわたしたちを包み込んでいます。それを伝えるのはわたしたちの務めです。